後屋敷小学校

「自ら授業を創る子どもの育成」

ー確かな子ども理解をもとに「国語力」を育てる国語の授業づくりを通してー

Ⅰ　研究の内容

1　研究目標

「国語力」についての子どもたちの学習状況の把握やそれに基づいた指導計画や指導方法を改善することによって、子どもたちの国語力の向上をはかる。

2　研究の内容

（1）「国語力」についての研修会
（2）子どもたちの国語力についての学習状況の把握と分析
（3）つけたい力を明確にした国語科の授業実践
（4）「特別支援教育」についての研修会

3　研究の方法

☆低・中・高学年部会に分かれて研究をすすめる。
☆各ブロックの授業実践について
○子どもの学びの「事実」を追究する。事実とは、教師が絶えず自分の見方を相対化し、自らの内面を変容させながら子どもに近づいていくことによって見えてくるもの。「事実」をとらえるために、子どもの体のあらわれ・あらわし、かかわりのありよう、自己評価や作品、子どもとのコミュニケーションなどをもとに子どもに起こっていることを振り返り考察していく。
○「普段の授業をかえる」という意識をもち、普段の授業に生かせる研究にし、授業実践の事前・事後に生かしていく。
○授業実践の中から課題を探り、解決方法を探る。また、単元終了後においても課題をさらに探り、解決方法を探る。その授業そのものの狭い視点ではなく、単元全体、あるいは教科全体などの広い視野から検討する。
○授業実践は、研究のねらいにあった学年、領域で行う。
○授業案については、できるだけ簡略なものを志向し、自分の授業実践のためにという意識で作成する。

4　具体的実践

○「国語力」についての学習会
○「特別支援教育」についての学習会　　岡輝彦研修主事要請
○「お店やさんごっこをしよう」　話すこと・聞くこと　１年　高野恵美子教諭
○「ちいちゃんのかげおくり」　読むこと　３年　山宮将仁教諭
○「やまなし」　読むこと　６年　荒井祐貴教諭

Ⅱ　成果と課題

授業づくりを中心とした実践的な研究の過程で実感したことは、目指す言語能力からぶれない授業構想の重要性である。国語力の向上をうたっているが、国語力とは、一言で言えば言語能力の総称であるから、まさにこれが根幹となる。

副主題に関わって、確かな子ども理解のためには、評価計画がより具体的に設定される必要があった。また、子どもたちの変容の明確な把握を行うためには、教師が教材を十分に理解し、子どもたちの実態に応じてどう解釈して授業を仕組んでいくのかを明確に構想すること。そして、１時間１単元だけに終わることなく、把握した子どもたちの実態を次の学習に確実に活用していくこと。さらに、教師が、学年全体の単元や学習のつながり、他学年との関連を理解し、継続して子どもたちの変容をとらえるために、その学習記録を継続していくこと。こうしたことが必要となる。カリキュラムとは、「学びの履歴」と言う意味があるが、

まさに、これはカリキュラムづくりに向かう。
実践研究の方途として、互いに授業を開くことを志向してきた。こうした中で、互いの授業を見合うことにより、さらに深く学ぶことができた。授業公開を原則とすることで実践の力に結びついた。これを継続し、教師自身のさらなる向上へとつなげたい。
確かな子ども理解に関わっては、いくつかの具体的な改善点もはっきりしてきている。また、日常生活とのかかわりや他教科との結びつき。さらには、自ら授業を創る子どもたちへ導いていくために、子どもたち自身が自分の課題を把握し、次の学習に生かしていくための工夫。など、本年度の研究で新たに抱かれた課題は大きい。
読書量は読解力に影響が大きい。など、ブロックの研究を進める過程で気づかれた知見もたくさんあるだろう。そうしたたくさんの気づきをまとめ、整理し、重ねていく中で、さらなる研究の深まりを推進していきたい。
以下にあげた『国語力向上に向けての気づき』は、この２年間の全体での授業研究会での宝である。これらは解明点であると同時に、授業づくりでの重要な課題点である。今後も、日常の授業づくりに生かされていくようにしていくとともに、その過程で得た新たな気づきを加えていきたい。

Ⅲ　成果物

国語力の向上に向けての気づき
（授業研究会でのふりかえりから）

(37) 読みのめあては、そのめあての解決にあたり、作品世界に向いていくことで価値のあるめあてとなる。価値のある課題へ向かわないと、学習の深まりは望めない。
(38) 子ども自身がもった読みの上でのめあてを、単元でつけたい力との関わりの中でどうしていったらよいかを考えて単元の構想を練る。
(39) 授業の評価に関わって、全員の結果（その時間の終末の姿）を見取ることはできても、途中の経過を見取ることは極めて難しい。子どもたちの変容をとらえる場合、これを見取る手だてを講じる必要がある。
(40) 音読が目標の場合、音読そのものの学習活動を十分行う。つまり、目標の達成のためには、目標に関わる主要な学習活動を十分行う必要がある。
(41)「音読」と「読み」は、相互に深め合う関係にある。つけたい力や目的意識に沿った形で、これを活用したい。
(42)『音読の工夫』の掲示など、学習の進行とともにクラスみんなで形成してきた共有された認識は、有効に作用する。
(43) 子どもたちは、登場人物に同化して読む傾向にあり、台詞の部分に着目する。地の部分の読みについてあらかじめ見解をもっておきたい。
(44) 教師の評価は、より具体的な児童の姿として明確にしていないと行うことが難しい。いつ・だれを・どこをとらえて・どのようにしていくのかなど、評価計画を具体的にする。
(45) 目指しているつけたい力の具体的な児童の姿がはっきりすることで、ねらいはもとより、評価の具体化や指導の具体化が図れる。たとえば、「やり取りする力」というのは子どもの姿でとらえるとしたらどういうことなのかである。
(46)「大きな声で話す」「はっきり話す」という判定をどうするかで明確になることがある。
(47) 教師による演示、師範は子どもたちへの影響が大きい。その効用は様々あるので、目的に照らして扱いを考えていくのがよい。
(48) 言語活動の設定は子どもたちの学習意欲を高める。活動を通してあるいは各活動において、どんな国語科の力がつけられるのか具体的に構想する。単元内での各時間との関連やつながり、段階などが明確になる。

（研究主任　小河　順一）